

埼玉アートシアター 通信

S A I T A M A A R T S T H E A T E R P R E S S

2015.1-2

NO. 55

蜷川
NINA
GAWA
80th ANNI
VER
SARY

彩の国 2015 年間ラインナップ発表!

さいたまゴールド・シアター / 『リチャード二世』 / 平幹二郎

テロ・サーリネン / 佐藤俊介の現在 Vol.1

庄司紗矢香 & ジャンルカ・カシオーリ

2015.1-2

NO. **55**

- 03 **PLAY** さいたまゴールド・シアター
『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』香港公演レポート
- 06 **PLAY** 彩の国シェイクスピア・シリーズ第30弾×さいたまネクスト・シアター第6回公演
『リチャード二世』
- 08 **LINE UP** 彩の国2015 年間ラインナップ発表!
- 10 **DANCE** MEET THE DANCE ~アーティストが学校にやってくる!
- 12 **DANCE** テロ・サーリネン『MORPHED』
フィンランドのダンスとテロ・サーリネン
- 14 **MUSIC** 佐藤俊介の現在 Vol. 1
ヴァイオリン×ダンス——奏でる身体
- 16 **MUSIC** 庄司紗矢香&ジャンルカ・カシオーリ
デュオ・リサイタル
- 18 **COLUMN** アーティストの原点16 平 幹二郎
- 19 **REVIEW** 2014.11-12 彩の国のアーツ
- 20 イベント・カレンダー／チケットインフォメーション
彩の国シネマスタジオ
- 23 THEATER BRIDGE
- 24 **COLUMN** 彩の国 LOUNGE vol.15



COVER
 『YUKIO NINAGAWA 80th Anniversary』彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督・蜷川幸雄

SAITAMA ARTS THEATER PRESS 2015.1-2 No.55
 編集◎市川安紀 [アルカディア社]、結城美穂子 デザイン◎中野一弘、鶴田大志、河西謙一 [bueno]

©公益財団法人埼玉芸術文化振興財団
 Published on 15 January 2015 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation
 ※掲載情報は、2014年12月25日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。

さいたまゴールド・シアター



『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』
 香港公演レポート

去る11月から12月末にかけて、香港、パリほか3カ国5都市ツアーを敢行し、各地で熱狂的歓迎を受けたさいたまゴールド・シアター。その皮切りとなった香港公演に同行した「マームとジブシー」を主宰する演出家、藤田貴大によるレポートをお届けする。

Photo ◎宮川舞子 (P3、香港公演右から5点)

香港 Hong Kong



会場となった葵青劇院



今回の香港公演から老婆たちが遺影を背負う演出が新たに加えられた各メンバーにとって縁が深い人物の遺影を背負っている



金鐘（アドミラルティ）での学生たちによるバリケード



香港でゴールド、鴉。そして旅を観た。

文 藤田貴大（「マームとジプシー」主宰・劇作家・演出家）

香港でさいたまゴールド・シアターから『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』を観た。もう、とてつもなかった。3回の公演、すべて観た。香港で観ることができてよかったとおもった。なぜなら、このとき香港では大規模なデモが行われていて、そのことがこの舞台と重なった気がしたからだ。いや、むやみに重ねるのはよくないとおもう。それはわかっているのだけれど。香港の現在の状況にたいして、書き下ろされたものでもないし。蛭川幸雄もどこまで香港を意識したかはわからない。結果、重なるものがあったかもしれない。しかし、明らかなのは客席だった。客席の反応。それは日本人に観せたところで得ることができない反応だった。香港の観客を惹きつけるチカラが蛭川演出にはあったのだ。それは偶然だとはおもわない。香港の現在において、この作品を「現在／ここで」上演することとは、どういう意味を持つのか。蛭川幸雄の勘が冴えまくっていたのだとおもう。そしてその大胆でありながら、デリケートでやわらかな手つきがあったからこそ、あの客席の反応だったのだろう。時代ま

でも引きつける才能が、やはり蛭川幸雄にはあったのだ。

本番前の楽屋の前はてんやわんやだ。大人数でたいへんなのはもちろんのこと、この年齢層だ。たいへんに決まっている。正直なはなし、こんな企画をしかも海外でやろうとするなんてどうかしている。ぼくならやらない。ぜったいにやらない。スタッフさんたちの臨機応変さとタフさに感動した。

「お湯がぬるいなあ。あついお湯のほうがいいなあ」

と、お湯について文句を言うひとに。「のどには、そんなにあつくはないほうがいいんだよ」

すぐさま、制作さんが対応する。（ぼくなら放っておく…）

カップ麺ばかり食べているひとに。

「こっちにきてカップ麺ばかり食べてない？」

「だってホテルの下のスーパーで安いだもん」

すこし間をあけて。

「でも小籠包とか食べたい」（知らないわ！）

「ペットボトルのキャップが開けられなくて、手が真っ赤になったよ」

そう言って、このメモをとっているほかにペットボトルを渡してくるひと。

（すこしうれしかった…）

「これ、コーヒーでしょうか？ クッキーでしょうか？」

ちいさな袋を持って、さまよっているひとがいる。

「コーヒーが飲みたいんですけど、コーヒーはどこですか？ これはクッキーですか？」

（それはクッキーだとおもうけど…）

「ペットボトルはどこに捨てるか決まっているのでしょうか？」

（おおきくペットボトルって書いています…）

「相撲の取り組みの結果が知りたいんだけど。知ってる人、いる？」

（本番前に相撲の結果って…）

こんな緊張感で、ほんとうに本番だじゃぶなのか。ってくらい、みんなべちゃくちゃべちゃくちゃ喋っている。でもなんだろう、どこかみなぎっている表情をしていたりとか。時折、鋭い眼光で舞台を見つめていたりとか。たぶんただの習いごと感覚でやっていることではないのだろう。とにかくこの年齢で、しかも容赦ない演劇をするということはカラダが伴うことだし。なにより、日本語を知らない海外の観客に、字幕はついてるけれど、熱量として日本語で届けるしかないという、この条件下で。それぞれ、

ぎりぎりのところで繊細な勝負をしているにちがいない。このことを、いい経験ですね、とか。その年齢で青春してるじゃん、なんていうチープなコトバで片付けられたくない。彼らは確実に仕事として舞台上に立っている。そして、蛭川幸雄のチームは彼らをこのレベルまで持ってきた。これは誰も真似できることではない。血の滲むような努力を、この数年やってきたのだろう。

舞台は、かっこよかった。ほんとうに、かっこよかったに尽きる。拍手も3回とも鳴りやまなかった。香港にて、勇敢だった。ぼくも、勇敢な彼らに拍手をした。彼らの旅に、おおきな拍手をした。

舞台には、蛭川幸雄も立っていたような気がした。それは上演中、役者さんたちは蛭川幸雄に言われたこと、怒鳴られたこと。過酷な稽古。彼との日々を思い

出しながら、演技していた気がしたからだ。彼に言われたことを現実的に捉えて、計算しながら表現していたようにおもった。それはほんとうにすごいことだ。つづく、蛭川幸雄に嫉妬する。蛭川幸雄のやわらかな手つきに嫉妬する。

藤田貴大（ふじた・たかひろ）

1985年生まれ。劇作家・演出家・「マームとジプシー」主宰。桜美林大学で演劇を専攻し、2007年「マームとジプシー」を旗揚げ。全作品の脚本と演出を務める。2011年上演「かえりの合図、まっただ食卓、そこ、きっと、しおふる世界。」にて第56回岸田國士戯曲賞受賞。今夏、2013年に話題を集めた『cocoon』（原作・今日マチ子）の新演出で大規模な全国ツアーを予定している。

さいたまゴールド・シアター

『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』
上演データ

■香港公演
2014年11月14日～16日
葵青劇院 演藝廳／全3公演

■東京公演 フェスティバル/トーキョー 14 参加
2014年11月23日～26日
にしすがも創造舎／全5公演

■パリ公演
2014年12月8日～12日
パリ市立劇場／全5公演

■豊橋公演
2014年12月20日・21日
穂の国とよはし芸術劇場 PLAT
主ホール／全2公演

■川越公演
2014年12月27日・28日
川越市市民会館やまぶき会館
中ホール／全2公演

パリ Paris

由緒あるパリ市立劇場で日本の現代演劇公演は初めて



パリ市立劇場の満員の観客から喝采を受けた



カーテンコールにて



公演のポスター

絶頂から奈落へ

「リチャード二世」と聞いて「ああ、あれね」と思い当たる方は、相当なシェイクスピア好きだろう。日本のみならず、本国イギリスでも上演頻度はそれほど高くない。しかも史劇とあって「とっつきにくいのでは」と身構えがちだが、内容はいたってシンプル。イングランド王リチャード二世の転落物語である。

「人間が墮ちる時に、落下距離が大きいほど悲惨さが増しますよね。リチャード二世の場合はエベレストの頂上からクレバスの底まで墮ちるようなもの。シェイクスピア作品の中には〈墮ちる〉人物が多く出てきますが、距離も勢いも一番激しいのはリチャード二世だと思います」

得意の絶頂から転落する主人公というトリチャード三世が浮かぶが、あそこまで残虐非道な生粋の悪党とはタイプが違う。英雄の誉れ高かった父、エドワード黒太子（ブラック・プリンス）が若くして亡くなったため自覚もないまま王位に就き、父のように人々の尊敬を集めるどころか、自己中心的で子どもじみた言動ばかりが目につく困った王なのだ。

「前半のリチャードにはまったく共感で



彩の国シェイクスピア・シリーズ
第27弾「ヘンリー四世」木場勝己
Photo ©渡部孝弘

きませんね。傲慢で、王位にふんぞり返っていて、自分の周りにイエスマンしか置かず、国家やリチャード自身のために思って諫める叔父の言葉にも耳を貸さない。自分が国庫の財源を浪費した穴埋めに法外な税金を人々に強要するし、さらには叔父の没後、その私有財産まで没収してしまう。ところがある時点から彼の転落が始まります」

対照的な従兄弟同士

リチャードを王座から引きずり下ろすのが、従弟のヘンリー・ボリングブルック。後のヘンリー四世で、2013年に当シリーズで上演された『ヘンリー四世』のタ

イトルロールその人だ（舞台では木場勝己が演じた）。リチャードに追放され、その間に自分が相続するはずだった公爵領を没収されて、復権をねらい挙兵する。

「リチャードはボリングブルックのことを『沈黙の王』と表現しますが、彼は寡黙だけれど有能な実務家。周囲にも信頼されて民衆の人気も高い。華麗な言葉で雄弁に語るわりに力のないリチャードとは対照的です。しかも2人は同い年。観客もリチャードの政治力と思慮のなさに嫌気がさしてきたところへ、自分の領地を取り戻すためにボリングブルックが戻ってくる。その辺りの書き方がシェイクスピアは実に巧みなんです。王位を奪うボリングブルックの上昇と、リチャードの失墜と、そのコントラストがこの芝居の一番の面白さですね。言うなれば、ボリングブルックの〈政治力〉とリチャードの〈演劇力〉の対決です」

〈政治力〉はともかく、〈演劇力〉とはこれいかに？ リチャードはボリングブルックに衆人環視の中で王位を譲り渡す屈辱をなめる。それまでの行状を考えれば自業自得なのだが、ここでリチャードは鏡に映る自らの顔を見て失望し、鏡を粉々に叩き割る。あらゆる感情がないまぜとなって爆発するクライマックスだ。

「時に芝居がかっているリチャードは、〈演技力〉を超えた〈演劇力〉の持ち主だと思います。鏡の場が上昇と下降の分水嶺ですが、リチャードは『ごっこ遊び』と自嘲し、その場に居合わせた人の目には『悲惨な大芝居』だと映る。一方のボリングブルックはまだ王位に就いていないうちから、早くも王様になったつもりで、『余が』などと言っています。今回の訳では、一人称をはっきりと〈余〉と〈私〉を使い分けました」

ネクストとの親和性

ボリングブルックには復讐する大義は確かにあっただろうが、リチャードの悲惨な末路を目の当りにすると、「そこまでしなくても……」との思いも湧いてくる。暴君を倒したヒーローも、行き過ぎは共感を得られない。ボリングブルック本人にもその自覚はあって、罪の意識に苦しんでいたことは、続編にあたる『ヘンリー四世』の通奏低音として描かれている。

『「ヘンリー四世」を観た方は、スピン・オフとしても楽しめると思いますよ。シェイクスピアが『リチャード二世』を書

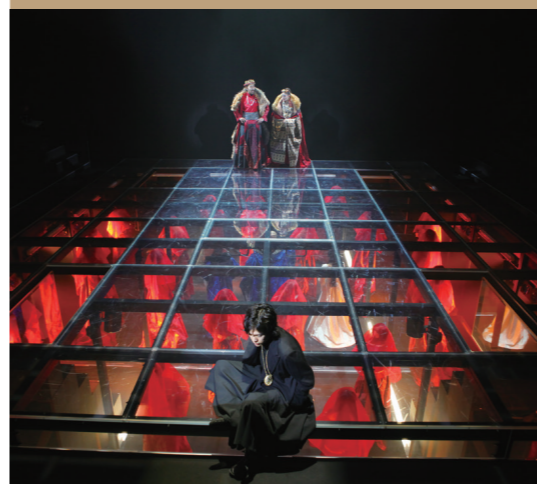
いたのは、『ロミオとジュリエット』や『夏の夜の夢』と同じ時期。一つの言葉に重層的な意味が込められていて、ノリにノって書いている印象がありますね。日本人にとっても宗教観などわかりにくい部分はあまりないですし、屹立する2人に翻弄される周囲の人物たちも面白い。痛い真理をズバッと突く庶民も、ちゃんと登場します。基本的にシェイクスピアは大衆作家ですから、やっぱり〈つかみ方〉が上手いんですね。あまり上演されないのが不思議なくらいの面白さです」

リチャードとボリングブルックは共に30そこそこと若く、他の人物たちも一部

を除いて若く設定しても違和感はない。「だからこそネクストにはぴったりの作品だと思いますね。イギリスではリチャードとボリングブルックの役を日替りで演じることもありますから、ネクストならそれも可能かも？ なんて、勝手に妄想しています（笑）。蜷川さんもネクストやゴールドを演出なさる際には、とんがって本当に過激ですから、どんな舞台になるのか今から楽しみです」

彩の国シェイクスピア・シリーズの新展開、そしてネクスト・シアターがさらに進化するための超えるべき大きな山。その挑戦をぜひ見届けたい。

さいたまネクスト・シアター 2012 — 2014



「2012年・着白の少年少女たちによる「ハムレット」
Photo ©宮川舞子



「2013年・着白の少年少女たちによる「オイディプス王」
Photo ©宮川舞子



「2014年・着白の少年少女たちによる「カリキュラ」
Photo ©細野晋司

彩の国シェイクスピア・シリーズ第30弾

さいたまネクスト・シアター第6回公演

『リチャード二世』

翻訳・松岡和子に聞く

愚かな王はいかにして転落したのか

さいたまネクスト・シアターが、いよいよ彩の国シェイクスピア・シリーズに登場する。ネクストとしては2012年の『ハムレット』に続くシェイクスピア作品への挑戦だが、今回は一般的には馴染みのあまりない英国史劇だ。まずは翻訳を手がけた松岡和子氏に見どころを教えてください。

取材・文◎市川安紀

STORY

若いイングランド王リチャード二世は、反逆を巡る決闘直前に従弟のヘンリー・ボリングブルックを追放し、ボリングブルックの父でリチャードの後見人でもあるジョン・オヴ・ゴートが没すると、アイルランド討伐の軍資金にするため全財産を没収してしまう。追放先で父の非業の死と王の非道な仕打ちを知ったボリングブルックは、大軍を率いて反旗を翻す。戦果も人望もなく追い詰められたリチャードは、讓位を決意。諸卿が見守る中でボリングブルックに王冠を渡すという屈辱をなめる。しかしポンフレット城へ移されたリチャードの悲劇はこれで終わりではなかった。

公演概要

蜷川幸雄 80周年記念作品
彩の国シェイクスピア・シリーズ第30弾
さいたまネクスト・シアター第6回公演

『リチャード二世』

日 時：4月5日(日)～4月19日(日)

4月	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
13:30	★	休	★	★	★	★	★	休	★	★	★	★	★	★	
18:30	★			★	★	★		休		★	★		★		

会 場：彩の国さいたま芸術劇場 インサイド・シアター（大ホール内）
※本公演は大ホール舞台上の特設劇場での上演のため、
客席及び椅子の形状が通常と異なります。

演 出：蜷川幸雄
作：W.シェイクスピア
翻 訳：松岡和子
出 演：さいたまネクスト・シアター

チケット(税込)
全席自由 一般：4,000円 メンバーズ：3,600円
発 売 日：一般1月31日(土) メンバーズ1月24日(土)

彩の国2015 年間ラインナップ

彩の国さいたま芸術劇場は開館21年目を迎えた本年も多彩なラインナップでお届けします。埼玉会館など他会場とあわせて、お近くで質の高い芸術文化をどうぞお楽しみください。

※公演は変更する場合があります。予めご了承ください。

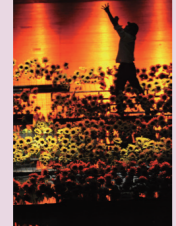
PLAY

3 march	4 april	5 may	6 june	7 july	8 august	9 september	10 october	11 november	12 december	2016年 1 january	2 february	3 march
 4/5 ~ 4/19 彩の国シェイクスピア・シリーズ第30弾 さいたまネクスト・シアター 第6回公演 『リチャード二世』 演出:蛭川幸雄 作:W.シェイクスピア 翻訳:松岡和子 詳細は → P.6 ~7	4/24 彩の国さいたま寄席 四季彩亭~三遊亭小遊三と 精鋭若手落語会 詳細は → P.21	 第5回公演「2014年・蒼白の少年少女たちによる『カリギュラ』」 Photo ©細野晋司	8月 コンフェティ劇団(カナダ) 『秘密のショートケーキ』 	7月 彩の国さいたま寄席 四季彩亭~平成26年 度彩の国落語大賞 受賞者の会(予定)	8月 オックスフォード 大学演劇協会	9/17 ~ 10/4 『海辺のカフカ』 原作:村上春樹 脚本:フランク・ギャラテ 演出:蛭川幸雄	10月 彩の国シェイクスピア・シリーズ第31弾 『ヴェローナの二紳士』 演出:蛭川幸雄 作:W.シェイクスピア 翻訳:松岡和子	10月 彩の国 さいたま寄席 四季彩亭	12月 劇場体験ツアー(予定)  Photo © Jean-Louis FERNANDEZ	1月 彩の国さいたま寄席 四季彩亭	2月 蛭川幸雄演出作品 (予定)	

海外公演

台湾/國家戯劇院 National Theater 3/26 ~ 3/29 ニナガワ×シェイクスピア レジェンド第2弾 『ハムレット』 演出:蛭川幸雄 作:W.シェイクスピア 翻訳:河合祥一郎		ロンドン/パーヒカンシアター 5/21 ~ 5/24 ニナガワ×シェイクスピア レジェンド第2弾 『ハムレット』	ロンドン/パーヒカンシアター 5/28 ~ 5/30 『海辺のカフカ』	ニューヨーク/ リンカーンセンター 7月 『海辺のカフカ』	2014年公演『海辺のカフカ』 Photo ©渡部孝弘	メルボルン/State Theatre 10月 『海辺のカフカ』	シンガポール/ Esplanade-Theaters on the Bay 10月 『海辺のカフカ』	ソウル/LG Arts Center 11/24 ~ 11/28 『海辺のカフカ』	2014年公演『海辺のカフカ』 Photo ©渡部孝弘	2014年公演 『海辺のカフカ』 Photo ©渡部孝弘	
--	---	---	---	--	--------------------------------	--	---	---	--------------------------------	------------------------------------	---

DANCE

 詳細は → P.21	5/30 ~ 5/31 コンドルズ 埼玉公演2015新作 埼玉公演 2014 新作 『ひまわり』 Photo © HARU	6/20 ~ 6/21 テロ・サーリネン『MORPHED』 Photo © Anton Sucksdorff	11月 ボワヴァン/ウバン/ラリュエ 『En Piste』	1月 インバル・ピント & アヴシャロム・ボラック 『DUST』 Photo © Daniel Tchetchik
--	--	--	-------------------------------------	---

MUSIC

3/28 光の庭プロムナード・コンサート 第74回 武久源造 (オルガン・ソロ)	4/25 光の庭プロムナード・コンサート 第75回 廣野嗣雄 (オルガン・ソロ)	5/16 光の庭プロムナード・コンサート 第76回 ばらまつりスペシャル 和田純子(オルガン)& 庄司知史(オーボエ)	6/27 光の庭プロムナード・コンサート 第77回 大木麻理(オルガン)& 村山貴幸(トランペット)	8/1 光の庭プロムナード・コンサート 第78回 夏休みスペシャル 中川紫音(オルガン)& 岡村知由紀(ソプラノ)	9/5 ピアノ・エトワール・シリーズVol.27 ベンジャミン・グロヴナー ピアノ・リサイタル	10/3 光の庭プロムナード・コンサート 第79回 川越聡子(オルガン)& アンドリュウ・コウジ・テイラー(ヴァイオリン)	11/15 マリア・ジョアン・ピリスと ピリスが選んだ若き才能との 共演(仮称)	12/12 光の庭プロムナード・コンサート 第80回 トワイライト・スペシャル 小野田良子(オルガン)& 高木潤一(フラメンコギター)	1/16 光の庭プロムナード・コンサート 第81回 原田真信(オルガン)& 佐々木洋平(テノール)	2/13 佐藤俊介の現在Vol.2 佐藤俊介(ヴァイオリン) 岡本誠司(ヴァイオリン) 原麻理子(ヴィオラ) 鈴木秀美(チェロ) スーアン・チャイ(フォルテピアノ)	3/5 「次代へ伝えたい名曲」第6回 小山実稚恵 ピアノ・リサイタル Photo © Kazuo Matsuura
	5/24 庄司紗矢香&ジャンルカ・ カシオーリ デュオ・リサイタル Photo © Kishin Shinoyama / Photo © Silvia Lelli	7/11 アンサンブル・ ウィーン=ベルリン Photo © Karlinsky	9/12 「次代へ伝えたい名曲」第4回 福田進一 ギター・リサイタル	9/26 タンブッコ・ パーカッション・ アンサンブル 	11/28 「次代へ伝えたい名曲」第5回 今井信子 ヴァイオリン・リサイタル キム・ソヌク(ピアノ) Photo © Marco Borggreve	11/29 ピアノ・エトワール・シリーズ アンコール! Vol.4 フランチェスコ・トリスターノ ピアノ・リサイタル	12/20 バッハ・コレギウム・ ジャパン ヘンデル(メサイア) 鈴木雅明(指揮) Photo © Marco Borggreve	1/31 ピアノ・エトワール・シリーズVol.28 チョ・ソンジン ピアノ・リサイタル	2/20 ピアノ・エトワール・シリーズ アンコール! Vol.5 福岡洗太郎 ピアノ・リサイタル	3/12 光の庭プロムナード・ コンサート 第82回 大塚直哉(オルガン)& 霧生貴之(トランペット)	

埼玉会館

3/5 埼玉会館ランチタイム・ コンサート第28回 東京吹奏楽団メンバーによる 金管五重奏+打楽器 詳細は → P.22	6/19 埼玉会館ランチタイム・ コンサート第29回 NHK交響楽団メンバー によるアンサンブル	7/26 埼玉会館ファミリー・クラシック 夏休みオーケストラランド! 飯森範親(指揮) 朝岡 聡(ナビゲーター) 東京交響楽団(管弦楽)	8/25 埼玉会館ランチタイム・ コンサート第30回 北川 翔(バラライカ)& 大田智美(アコーディオン)
---	--	---	---

他会場

7月 松竹大歌舞伎	9/27 タンブッコ・パーカッション アンサンブル深谷公演 会場:旧セツ梅酒造内 東蔵ホール	11/8 NHK交響楽団 下野竜也(指揮) 清水和音(ピアノ) 会場:さいたま市文化センター Photo © Naoya Yamaguchi / Photo © K.Miura
--------------	---	---

休館 ⇨

埼玉会館は、改修工事により2015年10月1日~2017年3月31日まで休館となります。



両神中学校成果発表より3点（下、次ページ上も）
全員で踊る「北斎ダンス」で思い切りジャンプ。
エネルギーを爆発させる。 Photo © Matron

両神中学校 Photo © Matron



ラストは思い思いのポーズでフィニッシュ！

三田川中学校（右も）



岩淵（左写真・左端）の指導でさまざまなエクササイズに挑戦。



両神中学校

グループの創作ダンスは自分たちがイメージしたようにできた（2年女子）／みんなでアイデアを出し合ってダンスに仕上がったのがよかった（2年男子）／自信がついてチームワークもUPした（2年女子）／体を動かす楽しさがわかった（2年男子）／ダンスの楽しさを知ることができた（3年男子）／もっと長い時間でやりたかった（3年女子）／練習は大変だったが発表は楽しんでできた（3年男子）／最初は何をしたらいいのか分からなかったけれど、からだも大きく動かせるようになり、楽しくできた（3年女子）／日に日に進化していくのを実感できた。またやりたいたい！（3年女子）

三田川中学校

想像していたのと違ったけれど楽しかった（1年女子）／アーティストの人がとてもカッコいいと思った。頭も体も使った（1年男子）／自由にポーズを考えるのが大変だった（1年女子）／すぐに終わってしまい残念だった。とても興奮して楽しかった（2年女子）／1人1人に目を向けてくれた（2年男子）／ペアの動きが楽しかった（3年男子）／ジャンプしたり走ったりとても楽しかった（3年男子）／もっと色々なことをやりたかった（3年女子）

MEET THE DANCE

～アーティストが学校にやってくる！

文◎市川安紀

両神中学校 Photo © Matron



テンポよく瞬時に決めポーズ。

『北斎漫画』をダンスに！ 自己表現の第一歩

埼玉県内の中学校をアーティストが訪れ、生徒たちにダンスと触れ合う機会を届けるプログラム「MEET THE DANCE～アーティストが学校にやってくる！」。2014年10～12月、小鹿野町立両神中学校（8日間・14時限）と、同町立三田川中学校（3日間・3時限）で体育の授業の一環として実施された。講師は振付家・ダンサーとして活躍し、学校等でのワークショップ経験も豊富な岩淵多喜子。

両神中学校は2～3年生合同で49人が参加。全身で自己表現する楽しさ、友人と協力して作品を創りあげていく経験と達成感を味わってほしいという狙いがある。

最終日には成果発表も。実施期間の中盤、11月下旬に同行すると、のびのびと体を動かす生徒たちがいた。思春期特有の照れも感じさせず、6～7人のグループに分かれて楽しそうに振り考えている。創作のテーマは葛飾北斎の『北斎漫画』。自分たちが選んだ絵からイメージを膨らませ、ダンスで表現することが目標だ。「なぎ倒されるのはどう？」「喜びのダンスをやってみようか」「波をイメージしてみたら？」など岩淵やアシスタントのダンサーたちからアドバイスも受けつつ、体をくねらせたり剣を振り回す動きを取り入れたり、アイデアを試しては「いいね～！」と盛り上がる生徒たち。与えられた振りを覚えるのではなく、試行錯誤しながら自分たちで考えることで動きの意味や面白さに自覚的になったよう

だ。「もっとわかりやすく見せたい」「楽しい動きにしたい」と欲も出て、徐々にバージョンアップしていった。そして、ねずみ、タコなどユニークな動物や騎馬武者などが登場する創作途中の作品をグループごとに通していく。岩淵からは「絵のイメージが踊りから見えてきた。もっと踊り込んでアイデアを出していけば、さらに良くなっていくと思います」。

発表会では太鼓や三味線の力強い音色に乗せ、「北斎ダンス・両神中バージョン」を繰り広げた。ドラマを感じさせる振りや流れるような動きを緩急をつけて表現した後は、自分の好きなジャンプで体育館を斜めに走り抜け、岩淵振付の総踊りでフィニッシュ！ 全員一体となった高揚感と躍動感に溢れ、踊ることの楽しさが見なざる晴れ舞台に、参観席からも熱い拍手が送られた。「今後も新しいことに出会ったら一生懸命頑張ってみると楽しめると思います」と岩淵が締めくくる。

一方、全校生徒32人が参加した三田川

中学校では、身体でのコミュニケーションから生まれるさまざまな動きの楽しさ、面白さを体感した。新聞紙のヒラヒラした動きを身体で再現するという難しいお題にも奮闘する生徒たち。両神中同様、回を追うごとにみな開放的になっていき、自由さが増していく。短い期間ながら、自己表現することの魅力を感じ取ってもらえたようだ。

自発的な「ものを創る力」を喚起し、心も体もやわらかく開放する「MEET THE DANCE」。確かな手応えは上気する生徒たちの顔が物語っていた。

講師◎岩淵多喜子（いわぶち・たきこ）

埼玉県出身。英国ランセンターにてコンテンポラリー・ダンスを学ぶ。1999年に自身のカンパニー「Dance Theatre LUDENS」を設立、全作品の演出、構成、振付を行うほか、ソロ活動、海外アーティストとの共同製作、学校ワークショップ等の人材育成など、ダンスの魅力と可能性を多角的に追求、発信している。（横浜ソロ×デュオ コンペティション）（財）横浜市文化振興財団賞及び若手振付家のための在日フランス大使館賞、舞踊批評家協会新人賞受賞。日本女子体育大学舞踊学専攻講師。

フィンランドのダンスとテロ・サーリネン

Tero Saarinen

text by Norikoshi Takao



[MORPHED] Photo © Heikki Tuuli

コンテンポラリー・ダンスシーンの強力な磁場として目が離せないフィンランド。そのフィンランドから自らのカンパニーを率い、テロ・サーリネンが来日する。上演するのは昨年ヘルシンキ・フェスティバルで上演した『MORPHED』。作品ごとにがらりと様相を変えるサーリネンの最新作は見逃せない。

文◎乗越たかお(作家・ヤサぐれ舞踊評論家)

一躍注目された フィンランドのダンス

フィンランドがコンテンポラリー・ダンスの世界で注目されるようになったのは1990年代後半くらいからだろうか。中央ヨーロッパの盛り上がりが一段落した頃、中央を取り囲む北欧や東欧、中東といった「周縁」諸国に次々と新しい流れが出てきたのだ。

なかでもフィンランドの取り組みは、一頭地を抜いていた。同国ではすでに戦前からドイツ表現主義舞踊、50年代にはモダンダンスがいち早く紹介されてきた

し、1970年には北欧最古といわれるクオピオ・ダンスフェスティバルが開催されて現在も続いている。素晴らしいのは国内ダンスの情報を一手に集めて英語で世界中に発信している「ダンス・インフォ・フィンランド」の存在だ。ダンスを優れた輸出産業としてバックアップしている視点の表れだろう。彼らのサイトによれば2013年だけで36のフィンランドのダンス作品が33カ国で上演されているという。

深く多彩なスタイルが並ぶ

そもそも「ヨーロッパにおけるコンテン

ポラリー・ダンスの母」といえるカロリン・カールソン(パリ・オペラ座バレエ団内に現代舞踊グループを作った)からして、フィンランド系アメリカ人だった。彼女はヘルシンキ・ダンス・カンパニー(HDC)の芸術監督も務めている。

筆者は2008年にフィンランドのフルムーン・ダンス・フェスティバル(FDF)に招かれ、その後HDCがあるヘルシンキ市立劇場の宿泊施設に10日間ほど滞在した。FDFは湖沼地帯の避暑地ピヤハルヴィで行われる国際フェスだがプログラムの秀逸さが有名で、その時期だけはダンス関係者が集まるという。日本との連携もあ

[HUNT] Photo © Marita Liulia



り、森下真樹や梅田宏明なども滞在して作品を創っている。

ヘルシンキ市立劇場は市の中心部にあってHDCの拠点でもある。海外の振付家の招聘にも積極的で、日本から舞踏の古川あずや黒田育世が作品を依頼されている。

また重要なのが巨大なワイヤー工場を改造したアールスペース「ゾディアック」である。ダンスのみならず様々な若いアーティストが集う場所として愛されている。

フィンランドのコンテンポラリー・ダンスの父と言われているのがヨルマ・ウオッチェネン。クオピオ・フェスの芸術監督として、世界のダンスシーンとフィンランドを強固に結びつけてきた。そして内省的なトニ・キッティ、大きなムーヴメントのスサンナ・レイノネン、ボストン・バレエなどでも活躍するヨルマ・エーロといった独自の身体性を発揮する世代が輩出されてきたのである(さらにはアート・

テロ・サーリネン

フィンランドを代表する振付家/ダンサー。振付家として、フィンランド国立バレエ団をはじめバットシェバ舞踊団、ネザーランド・ダンス・シアター(NDT)、リヨンオペラ座バレエ団など世界の一流カンパニーに振付作品を提供。また、リヨン・ダンス・ピエンナーレほか国際的なダンス・フェスティバルの常連で、仏政府からシュヴァリエ勲章、フィンランド獅子勲章など受賞多数。

【公演概要】

テロ・サーリネン『MORPHED』

日 時: 6月20日(土) ~ 6月21日(日)
会 場: 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
振 付: テロ・サーリネン
出 演: テロ・サーリネン カンパニー

チケット情報等、公演詳細情報は次号にて発表!



Photo © Tanja Ahola

サーカス系の新しい波や、コンセプチュアルなユルキ・カルトゥネンなどもおり、その内情は多彩で豊かだ。

たゆまぬ挑戦の証

テロ・サーリネン

テロ・サーリネンはそうしたフィンランドの分厚いダンス層の中でも一躍注目された、まさにスターである。フィンランド国立バレエ団でダンサーとして活躍していたが、1996年に自分のカンパニーを設立して精力的に創作を始める。好奇心旺盛で様々なスタイルを取り入れ、来日して大野一雄にも舞踏を学んでいる。

代表作のひとつ『HUNT』(2002年初演)は『春の祭典』をモチーフにしたソロ作品。サーリネン自身の力強く変化に富んだ動きに加え、今でいうプロジェクション・マッピングのように身体へ投影する映像も印象的な作品だ。

埼玉県舞踊協会のために一か月間滞在

した振り付け作『MESH』は2014年2月に彩の国さいたま芸術劇場で上演された。サーリネンの本質をよく掴んだダンサー達と、抑えた動きの笠井瑞丈が好対照だった。

サーリネンは作品ごとにガラリと発想を変えた挑戦を盛り込んでくる。今回来日する『MORPHED』もそのひとつだ。

初演は2014年のヘルシンキ・フェスティバル。冒頭からエサ=ベッカ・サロネンの曲、黒いフードを被った男達が歩き回る足音、そして光と影を強く使ったモノトーンの世界に引き込まれていく。唯一の舞台装置は垂れ下がった無数の紐で、スクリーンのようにも波のようにも変質していく。タイトルの通り、舞台上のすべてのものは変形し、移り変わっていくのだ。

人と社会と自然の諸相。変わり続ける中にこそ不変の真理が隠されている。サーリネンはそのに挑むことを許された、数少ないアーティストのひとりと言っていいだろう。

真の芸術家は、必ず冒険をするものだ

いま 佐藤俊介の現在 からだ

Vol.1 ヴァイオリン×ダンス——奏でる身体

彩の国さいたま芸術劇場の「現在」シリーズは、アーティストがホールと継続的な関係を結びながら、自由なアイデアによる連続企画を組んでいく画期的な試みだ。ヴァイオリニスト佐藤俊介のような数少ない「冒険する」タイプの音楽家にとって、これほど独自の技量を発揮できる機会はそうないだろう。第1回はダンスとのコラボレーションがテーマだ。



Shunsuke Sato
Masahiro Yanagimoto
Goro Tamura

取材・文◎林田直樹(音楽ジャーナリスト・評論家) Photo◎堀田力丸

ダンスとコラボレーション するということ

リハーサル時、佐藤に第1回のコンセプトについて聞いた。

「最近ダンスと音楽をあわせるのは割と流行っています。でもダンサーと音楽家とのインタラクション(相互作用)がコンセプトに入りきっていないものが多い。CDでよかったのではというものもある。そうではなくて、(ダンスとの関係で)僕が受けだったり、逆だったり、行ったり来たりがまずベースにあり、そのひとつひとつに“語る何か”がはっきりあるようにしたい。彩の国のスタッフチーム、このお二人、すごく恵まれた環境で、やっていますごく楽しい」

初顔合わせのリハーサルを少し見学した。ダンスの柳本雅寛と演出の田村吾郎との3人で実際に演奏を交えながら、動

きと場面を考え作っていく。まず目を惹いたのは、佐藤が歩きながら、あるいは他の二人の様子を見ながら、打ち合わせしながらヴァイオリンを弾いている姿の自然なことである。

演奏に集中し他の人に向かって音楽を聞かせる、という次元を超えて、人が普通に言葉を話すのと同じ感覚でヴァイオリンが完全に身体の一部になっている。

そしてリハーサルなのに、切れ切れの断片なのに、そこから出てくる音楽の何と素晴らしかったことだろう！

特に印象的だったのは、佐藤が演奏している身体全体の雰囲気や圧倒的な余裕があり、演奏上の問題点などどうの昔にクリアしたうえで、さらにその先を目指しているのがありありとわかったことだ。そこには私がこれまで佐藤俊介の演奏に

【公演概要】

いま 佐藤俊介の現在 Vol.1 からだ

ヴァイオリン×ダンス——奏でる身体

日 時：2月14日(土) 開演 15:00 (休憩なし)
会場：彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
目：ピーパー/バッサカリア
プロコフィエフ/《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》より第1楽章・第3楽章
バルトーク/《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》より 第3楽章
イザイ/《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第2番》より 第4楽章
バッハ/《無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番》より〈シャコンヌ〉ほか

※やむを得ぬ事情で公演内容を一部を変更する場合がございます。

出演：演出の3名と林田直樹(音楽ジャーナリスト)のアフタートーク開催

チケット(税込) 好評発売中

一般：4,000円 U-25*:2,000円 *U-25チケットの詳細はP.23をご覧ください。

メンバーズ：3,600円

※本公演は、演出の都合により正面席のみの販売になります。



感じていた、恐るべき非凡さの核のようなものはっきりと感じられた。ある種の「不敵さ」とでも言い換えられるだろうか。しかも期待をさらにそそられたのは、この稀有なヴァイオリニストの存在を前にしてダンスの柳本雅寛と演出の田村吾郎が、互角に渡り合い音楽の領域に浸食することを恐れず、快い緊張感をもってコラボレーションを進めていたことだ。

ダンサー、演出家の立場から

柳本は言う。

「弾いている俊君の身体が、僕のインスパイア(ひらめき)に関わってくるんです。彼が勢よく弾いていると、それがこっちの身体にも来る。そして俊君の対応するフィジカルティ(身体性)がまた僕の動きに呼応して反応する。即興で踊るパートもたくさんあります。これを文字にしちゃうと語弊があるかもしれませんが(笑)、動きなんて僕、どうでもいいと思っているんです。むしろ、その動きを使ってどういうふうにししゃべるかが重要で。ある程度美しくクオリティあるように動けるのは当たり前。それよりも動きを作る前のシチュエーション、後のシチュエーションを念頭において、どう踊るかが大事なんです」

柳本は舞台上での動きだけでなく、ど

んなときでも、取材中ですえ身体全体からすごくいい気を発散している、それがすべて彼の表現とつながっているという印象を受けた。舞踊家として、本当に素敵なアイデアと言葉に満ちた人だ。

そして演出の田村吾郎も、静かで鋭くて穏やかな雰囲気がとても魅力的だ。「僕は肩書きとしては演出ですが、もともと演出家ではなくてデザインの方、アートディレクターなんです。複雑な利害関係を最適化している仕事なので。僕に求められているのはソリューション(物事の解決方法を与えること)だと思っていて、何かしらスキーム的に問題があった場合に、僕が呼ばれている気がしているんです。じゃそれに対してこういう解決策がありますよということを僕は提案している気がしています。最適解を与えるというか。演出家が絶対的な権限を持つというつもりではなくて、俊介君がこの曲はこういうふうにしたい、雅さんはこうしたいと。それはステージ上のことですが、ある意味では1人称ですよ。それを3人称に直すのが僕の仕事です」

演出家とは多くの場合カリスマであったり指導者であったりするものだが、こんな柔軟な、ある種「囚われない」考え方で舞台全体をみている人がいるのは、何と心強いことだろう。

この3人、出会ったばかりというのにお互いをすぐに信頼し合い、ファーストネームで呼び合う関係を築き上げた。そこには、それぞれの世界で高い質の仕事をしてきた者同士の自信と謙虚さとお互いへの敬意に

満ちた雰囲気があった。これはきっといい舞台になるはずだ。

最後にもうひとつ、佐藤の音と身体の問題についての興味深い言葉をご紹介します。

「演奏家として、“無駄な動きがないように”とか“音だけの勝負”という意見には僕は全く正反対で、ライブであるということは(空気の動きをも含めた広い意味で)その人の動きを見ることでもあると思う。コンサートに行き、音だけでどんなに良くとも、この人は身体を通しては何もメッセージを伝えていないと敏感に感じる方なので……」

今回のコラボレーションはとても自然なことだと思っています。舞台空間を使うのは初めてですが、“動き”を表現として使うというのはいつもと一緒に、違和感はないです」

今回のリハーサルでは、演奏している佐藤の身体の動きに舞踊家としての柳本が驚くほど大胆に侵入し、また佐藤も一演奏家としての既成の領域を超えんとするほどの動きで舞踊と絡み合う。音楽にも舞踊にも関心ある人には、きっとエキサイティングな、前例のない舞台になるはずである。



Masahiro Yanagimoto

柳本雅寛

(やなぎもと・まさひろ)
/ダンス

1990年より渡欧する98年までクラシックバレエを踊る。2006年まで西欧を中心に世界各地で踊る。06年帰国、「C/ompany」結成。07年以降は毎年新国立劇場に出演。11年より自身のユニット「+81」を結成。13年 JAPON dance project 立ち上げメンバー。



Shunsuke Sato

佐藤俊介

(さとう・しゅんすけ)
/ヴァイオリン

モダン、バロック双方の楽器を弾きこなす多才な音楽家。コンチェルト・ケルンおよびオランダ・バッハ協会のコンサートマスター。ベルリン・ドイツ・オペラ管等と共演。第17回 J. S. バッハ国際コンクールで第2位および聴衆賞を受賞。



Goro Tamura

田村吾郎

(たむら・ごろう)
/演出

RamAir.LLC 代表。アートディレクターとして様々な分野で活動。オペラ、舞台、演奏会などの演出も数多く行う。代表的な公演は、日本フィルハーモニー交響楽団「MPS 西本智実×田村吾郎」Vols.1 ~ 3など。東京工科大学デザイン学部専任講師。



Photo © Kishin Shinoyama

Photo © Matteo Maso

庄司紗矢香 & ジャンルカ・カシオーリ デュオ・リサイタル 屈指のデュオ三たび登場

ワールドワイドな活動で輝かしいキャリアを積んでいる庄司紗矢香と、イタリアの奇才ピアニスト、ジャンルカ・カシオーリ。彼らのデュオ公演を三たび彩の国さいたま芸術劇場で聴くことができる。耳になじんでいる名曲の数々を、生き生きと今現在の音楽として提示してみせるスリリングな演奏に期待が高まる。

文◎真嶋雄大 (音楽評論家)

二人が奏でるベートーヴェン

庄司紗矢香とジャンルカ・カシオーリ、この垂涎のデュオが三たび彩の国さいたま芸術劇場のステージに立つ。初回は2010年10月31日、プログラムはベートーヴェンのオール・ヴァイオリン・ソナタだった。彩の国では第8番、第5番「春」、第9番「クロイツェル」を演奏したが、筆者が聴いたのは11月8日のサントリーホールでの、第2番、第5番、そして第9番。ベートーヴェンが作品番号を付けた10曲のヴァイオリン・ソナタは極めて特徴的だ。1798年から1812年までのおよそ14年間

に書かれ、その前後での完成作品は残されていない。その10曲のヴァイオリン・ソナタすべてにベートーヴェンは大胆かつ革新的な性格を与え、また第10番に見られるようにフランスのヴァイオリン楽派の語法を積極的に採り入れている。そしてその10曲は、あくなき演奏効果の表出や極限の内的精神性が極限まで追及されているのである。

そのベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタに対峙する庄司紗矢香のアプローチはきわめてストイックだ。けれども決して音楽が硬直していたり、柔軟性に乏しいわけではむしろない。それどころかフ

レーズは生き活きと躍動し、色彩はグラデーションのように移ろう。ただ輝かしいだけのヴァイオリニズムではなく、ベートーヴェンの内省に肉迫する精神の吐露である。それが実に美しい。緊張と弛緩、その瞬間にしか生まれ得ない絶妙のやり取りが舞台上で丁々発止と繰り広げられる。ゆえに情景は刻々と変化して類稀な音楽的感興が織り上げられる。その庄司を陽光のような暖かさで包み込んだのがカシオーリだ。一時不調を伝えられていたカシオーリではあったが、それを払拭するどころか、多彩な要素を内包する鮮やかな室内楽を構築し、結果的に

時代を牽引する恐るべきデュオが誕生することになったのである。

庄司&カシオーリというデュオの特徴

それまで庄司紗矢香のレパートリーは、プロコフィエフやショスタコーヴィチ、ヤナーチェクやシューマンといった、ロマン派以降の、どちらかという独特の色彩感を宿した楽曲が多かったような記憶がある。もちろんコンチェルトであれば、古今東西の名曲ということになるだろうが、少なくともリサイタルでの取り組みはひとつの方向を明確に示していた。それが2010年、それまでのイタマル・ゴランとのデュオを解消し、カシオーリと組むと本人から直接聞いたとき、少なからず胸騒ぎを覚えたものだ。なぜか。

それはカシオーリが極めて個性的なピアニストであり、庄司紗矢香とのデュオが果たして室内楽として成立するのか、音楽的に破たんすることなく、高度な次元にまで到達するのか少々懸念を抱いたからである。

カシオーリが創造するのは異次元の空間だ。初来日した97年、ミョンフン指揮ローマ・サンタ・チェチーリア国立管とのベートーヴェン「皇帝」、99年リサイタルでの、バッハ=ブゾーニ《トッカータとフーガ》、ドビュッシー《前奏曲集》、リゲティ、メシアン、ブーレーズ等々。ここでのカシオーリは、ロマンティックな激昂、ナイヴなエキセントリック性、エネルギーな老獪さといったいわば矛盾に満ちたファクターを空間に投げ、一旦漂々させることによってそこから音楽を紡いで行くような、意外性に満ちた新鮮な感覚で聴くものを圧倒した。もしそれが、すべてカシオーリの計算だとしたら、彼の音楽性や創造性はどこまで飛翔するかと空恐ろしくなったほど。

しかしアンサンブルへの懸念は、まったくの見当違いだった。庄司紗矢香とジャンルカ・カシオーリは、満を持したように取り組んだベートーヴェンのソナタで、強靱な音楽性を融合させた濃厚で雄弁、そして詩情が香り立つ緻密な室内楽

を築き上げたのである。さらに2回目となる2012年のリサイタルでは、ヤナーチェク、ベートーヴェン、ドビュッシー、シューマンのすべてソナタを並べるといふ重厚なプログラムで、情緒纏綿たる情念を私たちの心に刻み込んだ。

今回の公演では

2015年5月、2人はモーツァルト《ヴァイオリン・ソナタ 長調》KV 379 (373a)、ベートーヴェン《ソナタ 第6番 イ長調》、ストラヴィンスキー《イタリア組曲》、そしてラヴェル《ソナタ 長調》というプログラムで、また新たな進境を見せてくれるだろう。かつてこの彩の国さいたま芸

術劇場で2006年、筆者は庄司紗矢香を聴いた。その時のパートナーはゴランであり、プログラムはシューマン、ショスタコーヴィチ、R. シュトラウスであった。その時も集中力や緊密度は比類なく、自己の内面と真摯に向き合った佇まいが鮮烈ではあったが、あれからもう10年近くが経つ。その間、庄司紗矢香はカシオーリという並びないパートナーを得、互いの感性を研ぎ澄まし、時には歩み寄り、時には屹立して絶美たる音楽を確立してきたのである。

円熟の一途を辿るデュオは今回、閃きと創意に満ち、生命力が謳歌するまさに音楽の愉悅を具現化してくれるに違いない。



Photo © Kishin Shinoyama



Photo © Silvia Lelli

庄司紗矢香 (ヴァイオリン) しょうじ・さやか

1999年バガニーニ国際ヴァイオリン・コンクールで史上最年少、日本人として初めて優勝。テミルカーノフ、アシュケナージ、ヤンソンス等の世界を代表する指揮者やドイツ・カンマー・フィル、サンクトペテルブルク・フィル等の著名オーケストラと多数共演。使用楽器は1729年製ストラディヴァリウス「レカミエ(Recamier)」。

ジャンルカ・カシオーリ (ピアノ) Gianluca Cascioli

1979年イタリアのトリノ生まれ。94年ウンベルト・ミケーリ国際ピアノ・コンクールで優勝。アバド、チョン・ミョンフン、ゲルギエフなど名だたる指揮者やウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ボストン響、シカゴ響等多くの著名オーケストラと共演。作曲家としても活躍しており、さまざまな国際コンクールで受賞している。

【公演概要】

庄司紗矢香&ジャンルカ・カシオーリ デュオ・リサイタル

日 時：5月24日(日) 開演15:00
会 場：彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
出 演：庄司紗矢香(ヴァイオリン)、ジャンルカ・カシオーリ(ピアノ)
曲 目：モーツァルト/ヴァイオリン・ソナタ第35(27)番 長調
ベートーヴェン/ヴァイオリン・ソナタ第6番 イ長調
ストラヴィンスキー (ストラヴィンスキー&ドゥシュケン編曲) / イタリア組曲
ラヴェル/ヴァイオリン・ソナタ 長調

チケット(税込) 好評発売中
一般：正面席6,000円/バルコニー席5,000円
U-25* (バルコニー席対象)：2,500円
メンバーズ：正面席5,500円
*U-25チケットの詳細はP.23をご覧ください。

Mikijiro Hira

俳優 平 幹 二 郎

「老木」などと笑うのは本人のみ。枯れるどころかますますエネルギーに観る者を魅了する俳優、平幹二郎。強い意志から入った世界ではないものの、名だたる演出家との出会いを余さず糧として、押しも押されぬニッポンの大木となった。

取材・文◎市川安紀



「空白期間は自分を見つめ直す良い機会でした」

浅利慶太と蜷川幸雄

小学校では学芸会にも出たことがないほどの恥ずかしがりやでした。今でも自分の言葉で人前で喋ることは苦手ですね。でも俳優は仮面をひとつ被って自分の心に響く（人の言葉）を喋ればいい。広島の高校時代、演劇部に誘われて出た演劇コンクールで優勝し、人前で何かを発信することの快感を感じたんです。進路を考えあぐねていた時、たまたま俳優座養成所の募集記事を見て受験し、挑戦2度目で合格。青春時代を謳歌しつつ、3年後に俳優座に入団できました。たぶん背の高さで選ばれたんじゃないかな。

俳優座では千田是也先生に良い役をつけてもらいましたが、転機は劇団四季の浅利慶太さんに抜擢された『アンドロマック』（66年）。当時は政治の季節で、新劇俳優も揃ってデモに参加する時代。僕は1人反発して歌舞伎を観に行ったりして、俳優座に居づらくなっていました。そんな時に会った浅利さんの芸術至上主義的な芝居づくりは、まさに僕が求めていたものです。それから毎年日生劇場で浅

利さんが演出する芝居に主演するようになりましたが、四季はミュージカル路線へ。僕には縁が遠くなりました。

その頃ドラマの撮影現場で出会ったのが蜷川幸雄さんです。「今度芝居に出してよ」と直談判して、『卒塔婆小町』（76年）で初出演。99歳の老婆役でした。二枚目は二枚目らしく、すくくと立ち、朗々と喋る。そんな主役哲学を持つ浅利さんと、蜷川さんは正反対。「泣け、わめけ、転が



『ハムレット』（1978年／帝国劇場）写真提供：東宝
衣裳は辻村ジュサブロー（現・寿三郎）

れ、台詞はよく分からなくていいから怒鳴れ！」ですからね。最近「台詞は分かるように言え」と言っているようだけど（笑）。以来、『王女メディア』『近松心中物語』『NINAGAWA マクベス』『テンペスト』『タンゴ・冬の終わりに』など数多くコンビを組みました。『ハムレット』（78年）では真っ赤なビニールのスカートを履いて、35段の階段舞台を汗だくで駆けずり回り、まるでサーカス。千秋楽には歩けなくなったほどです。

空白期を経て再会

途中、僕が肺ガンであることを伏せて舞台を降板したために蜷川さんとの間に誤解が生じて、10年間ほど空白期間がありました。でも自分を見直すにはちょうど良かったと思います。鶴山仁さんや栗山民也さんなど、違うタイプの演出家とも良い仕事ことができましたから。千田先生が基礎を作ってくれて、浅利さんが大きな幹に、蜷川さんが花と実を成らせてくれた。栗山さんや鶴山さんが栄養を土に入れてくれて、平幹二郎という老木になりました（笑）。出会いに感謝ですね。

蜷川さんとは98年に再会し、『グリークス』など印象深い舞台を共にしています。特に彩の国さいたま芸術劇場で上演した『リア王』（08年）は忘れ難いですね。舞台稽古までうまく行かず、初日の開幕前に蜷川さんが楽屋に来て「セーブしないでガンガンやってよ」と。幕が開いた途端、宇宙遊泳しているかのような自由を感じて、最後まですごく楽しく演じられたんです。初めての経験でした。

最近の蜷川さんには僕の表現を洗い直してもらっている気がします。今度は『ハムレット』のクローディアス。近代的な「悪」として強く存在したいと思います。さてどんな厳しいダメが出ますか。

ひら・みきじろう 1933年広島県出身。俳優座退団を機に浅利慶太演出『ハムレット』に出演、新境地を拓く。蜷川幸雄演出作品も数多く、『王女メディア』『NINAGAWA マクベス』など海外でも高い評価を得る。病を経て約10年後に蜷川と再会、『グリークス』『リア王』『唐版 滝の白糸』などに出演。主宰する「幹の会」ではシェイクスピア作品の上演をライフワークとする。最近の舞台に『炎立つ』『黄昏にロマンス』など。読売演劇大賞最優秀男優賞、菊田一夫演劇賞ほか受賞多数。

REVIEW 2014.11-12

彩の国④アーツ

MUSIC 11月8日

「次代へ伝えたい名曲」第2回 仲道郁代ピアノ・リサイタル

前半はモーツァルト《ピアノ・ソナタ第3番 変ロ長調》、三善晃《ピアノのためのアン・ヴェール》、ドビュッシーの《版画》。透明感のある演奏で、すがすがしい気持ちに。後半はショパンの《夜想曲第20番 嬰ハ短調》、《バラード第1番 ト短調》、《幻想ポロネーズ 変イ長調》、《アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調》。「次代へ伝える」というコンセプトでショパン作品を選ぶのは悩んだことと思う。仲道のソフトな物腰と笑顔で自然と演奏に引き込まれてしまうのだが、実は考え抜いた説得力のある、盤石なベテランの演奏だった。



Photo ◎加藤英弘

MUSIC 11月29日 埼玉会館大ホール

新日本フィルハーモニー交響楽団 井上道義（指揮） 竹澤恭子（ヴァイオリン）

病気療養から復帰後初の、井上道義と新日本フィルとの共演はブラームス・プロ。ソリストは、井上が「ブラームスの協奏曲にかけては日本人では並ぶものがない」と太鼓判を押す竹澤恭子。マエストロに促されてのアンコールともに、スケールの大きい深い演奏を聴かせた。後半、選曲理由を是非話したいとマイクを取った井上。2012年のN響公演時に通りかかった別所沼公園の美しさに感銘を受けたとの挿話を受けて、交響曲第2番への聴衆の親近感もぐっと深まり、細部に至るまで行き届いたタクトで完全復活を印象付けた。アンコールのワルツも粋な選曲。

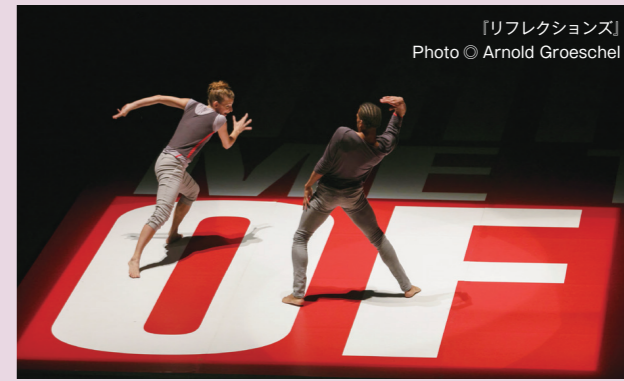


Photo ◎加藤英弘

DANCE 11月8日・9日

バンジャマン・ミルピエ L.A. Dance Project

パリ・オペラ座バレエ団の芸術監督に就任したバンジャマン・ミルピエが率いる、ロサンゼルスを拠点とする新進気鋭のカンパニー。ミルピエを含む3人の振付家の作品で構成された。ミルピエ振付『リフレクションズ』。鮮やかな赤白の舞台にグレーの衣裳で、ダンサーたちは互いの距離や曲の波長に呼応しながら、同調し、反射し、舞台背景にある言葉の意味をも掻き立てた。ガット振付『モーガンズ・ラスト・チャグ』では、絶え間なく変化する動きで異世界に運ばれる。フォーサイス振付の『クインテット』では伝説的名作を力強く表現した。



『リフレクションズ』
Photo ◎ Arnold Groeschel

MUSIC 12月11日

埼玉会館ランチタイム・コンサート第27回 渡辺克也 オーボエ・リサイタル

ドイツを拠点に活躍しているオーボエ奏者、渡辺克也が登場。軽妙なトークとともに、ルフェーブルの《2つの小品》作品102、バラディールの《演奏会用独奏曲》等、オーボエのめずらしい作品を披露した。渡辺の演奏は速いパッセージでも一音一音をたっぷりと豊かに聴かせ、オーボエと伴奏のピアノの音だけなのに、音の厚みがあるスケールの大きな曲を聴いたような気持ちになった。終盤はドイツから帰ってきたばかりという彼がクリスマスを迎えるドイツの様子を伝えつつ、《ホワイト・クリスマス》ほかアンコールも含め3曲、クリスマス・ソングを演奏した。



Photo ◎加藤英弘

column

技術の裏付けあってこそ

浅利慶太は常々「発声は発想だ」と語っていたという。「脚本をきちんと読んで台詞の意図を正しく発想すればふさわしい発声になる、と。正しいメソッドだと思います。一方、蜷川さんが求めた激しさ、真実の声を実現するためにも、ちゃんとした発声が必要です。ただ怒鳴るだけでは内容が伝わらない。浅利さんと組んでいた時の技術を使って蜷川さんが欲する激しさや醜さに応えていたから、いいコンビが十数年続いたんでしょうね」（平）。

PLAY		DANCE		MUSIC		CINEMA	
15	16	17	18	19	20	21	22
15 木	16 金	17 土	18 日	19 月	20 火	21 水	22 木
16 金	17 土	18 日	19 月	20 火	21 水	22 木	23 金
23 金	24 土	25 日	26 月	27 火	28 水	29 木	30 金
30 金	31 土	1 日	2 月	3 火	4 水	5 木	6 金
6 金	7 土	8 日	9 月	10 火	11 水	12 木	13 金
13 金	14 土	15 日	16 月	17 火	18 水	19 木	20 金
20 金	21 土	22 日	23 月	24 火	25 水	26 木	27 金
27 金	28 土	29 日	30 月	31 火	1 水	2 木	3 金
3 金	4 土	5 日	6 月	7 火	8 水	9 木	10 金
10 金	11 土	12 日	13 月	14 火	15 水	16 木	17 金
17 金	18 土	19 日	20 月	21 火	22 水	23 木	24 金
24 金	25 土	26 日	27 月	28 火	29 水	30 木	31 金
31 金	1 土	2 日	3 月	4 火	5 水	6 木	7 金
7 金	8 土	9 日	10 月	11 火	12 水	13 木	14 金
14 金	15 土	16 日	17 月	18 火	19 水	20 木	21 金
21 金	22 土	23 日	24 月	25 火	26 水	27 木	28 金
28 金	29 土	30 日	31 月	1 火	2 水	3 木	4 金
4 金	5 土	6 日	7 月	8 火	9 水	10 木	11 金
11 金	12 土	13 日	14 月	15 火	16 水	17 木	18 金
18 金	19 土	20 日	21 月	22 火	23 水	24 木	25 金
25 金	26 土	27 日	28 月	29 火	30 水	31 木	1 金
1 金	2 土	3 日	4 月	5 火	6 水	7 木	8 金
8 金	9 土	10 日	11 月	12 火	13 水	14 木	15 金
15 金	16 土	17 日	18 月	19 火	20 水	21 木	22 金
22 金	23 土	24 日	25 月	26 火	27 水	28 木	29 金
29 金	30 土	31 日	1 月	2 火	3 水	4 木	5 金
5 金	6 土	7 日	8 月	9 火	10 水	11 木	12 金
12 金	13 土	14 日	15 月	16 火	17 水	18 木	19 金
19 金	20 土	21 日	22 月	23 火	24 水	25 木	26 金
26 金	27 土	28 日	29 月	30 火	31 水	1 木	2 金
2 金	3 土	4 日	5 月	6 火	7 水	8 木	9 金
9 金	10 土	11 日	12 月	13 火	14 水	15 木	16 金
16 金	17 土	18 日	19 月	20 火	21 水	22 木	23 金
23 金	24 土	25 日	26 月	27 火	28 水	29 木	30 金
30 金	31 土	1 日	2 月	3 火	4 水	5 木	6 金
6 金	7 土	8 日	9 月	10 火	11 水	12 木	13 金
13 金	14 土	15 日	16 月	17 火	18 水	19 木	20 金
20 金	21 土	22 日	23 月	24 火	25 水	26 木	27 金
27 金	28 土	29 日	30 月	31 火	1 水	2 木	3 金
3 金	4 土	5 日	6 月	7 火	8 水	9 木	10 金
10 金	11 土	12 日	13 月	14 火	15 水	16 木	17 金
17 金	18 土	19 日	20 月	21 火	22 水	23 木	24 金
24 金	25 土	26 日	27 月	28 火	29 水	30 木	31 金

PLAY

彩の国シェイクスピア・シリーズ第30弾
さいたまネクスト・シアター第6回公演
『リチャード二世』

チケット発売日 一般：2015年1月31日(土)
メンバーズ：2015年1月24日(土)

PLAY

彩の国さいたま寄席 四季彩亭
～三遊亭小遊三と精鋭若手落語会

春の四季彩亭は、笑点でもおなじみ三遊亭小遊三と精鋭若手落語家たちとの落語会。どうぞお楽しみに



Photo ©加藤英弘

チケット発売日 一般：2015年1月16日(金)
メンバーズ発売中

日時：4月24日(金) 開演14:00
会場：彩の国さいたま芸術劇場 小ホール
出演：三遊亭小遊三、三遊亭遊馬、柳亭小痴楽、桂宮治

チケット(税込) 一般：3,000円
ゆうゆう割引(65歳以上・障がい者)：2,000円
メンバーズ：2,700円

*U-25チケットの詳細はP.23をご覧ください。

DANCE

コンドルズ 埼玉公演2015新作

毎年恒例、さいたま9度目の登場のコンドルズ。学ラン姿の男性たちがステージいっぱいダンスを繰り広げる人気公演!



Photo © HARU

チケット発売日 一般：2月28日(土)
メンバーズ：2月14日(土)

日時：5月30日(土) 開演14:00 / 19:00
5月31日(日) 開演15:00

※演出の都合により、開演時間に遅れますと入場をお待ちいただく場合がございます。予めご了承ください。

会場：彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
構成・映像・振付：近藤良平
出演：コンドルズ

チケット(税込) 一般：前売 S席4,500円、A席3,500円 / 当日 S席5,000円、A席4,000円
U-25*：前売 S席3,000円、A席2,000円 / 当日 S席3,500円、A席2,500円
メンバーズ：前売 S席4,100円、A席3,200円 / 当日 S席4,500円、A席3,600円
※A席(サイドバルコニー)は舞台の一部が見切れます。予めご了承ください。

MUSIC

アンサンブル・ウィーン=ベルリン

ウィーン・フィル、ベルリン・フィルなどの首席奏者が揃う、木管五重奏のスーパー・アンサンブルが登場。



Photo © Karlinsky

チケット発売日 一般：2月14日(土)
メンバーズ：2月7日(土)

日時：7月11日(土) 開演15:00
会場：彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
出演：カール=ハインツ・シュッツ(フルート)、ジョナサン・ケリー(オーボエ)、アンドレアス・オッテンザマー(クラリネット)、リチャルト・ガラ(ファゴット)、シュテファン・ドール(ホルン)

曲目：メンデルスゾーン / 『真夏の夜の夢』木管五重奏版 ほか

チケット(税込) 一般：4,500円
U-25*：2,000円
メンバーズ：4,100円

埼玉会館ランチタイム・コンサート第29回

NHK交響楽団メンバーによるアンサンブル

弦楽器の名手達による、弦楽四重奏やピアノをまじえた五重奏など彩り豊かなアンサンブルをお贈りします。

チケット発売日 一般：3月1日(日)
メンバーズ：2月28日(土)

日時：6月19日(金) 開演12:10(終演予定13:00)
会場：埼玉会館 大ホール
出演：大宮臨太郎・松田拓之(ヴァイオリン)、坂口弦太郎(ヴィオラ)、山内俊輔(チェロ)、高橋希(ピアノ)

曲目：チャイコフスキー / 花のワルツ、ハイドン / 弦楽四重奏曲第38番「冗談」より ほか

チケット(税込) 全席指定 1,000円

彩の国シネマスタジオ LINE UP 2015.1-3

2015年1月23日(金)~25日(日)
会場：彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール

優秀映画鑑賞推進事業Wプログラム
A『張込み』 B『悪い奴ほどよく眠る』
C『黒い画集』 D『白い巨塔』

23日(金) 10:30(C) / 13:40(B) / 17:30(D)
24日(土) 10:30(B) / 14:40(D) / 18:30(A)
25日(日) 10:30(D) / 14:40(A) / 17:50(C)

A『張込み』(1958年 / 116分)
監督：野村芳太郎
出演：大木実、宮口精二、菅井さん ほか

B『悪い奴ほどよく眠る』(1960年 / 151分)
監督：黒澤明
出演：三船敏郎、森雅之、香川京子 ほか

C『黒い画集 あるサラリーマンの証言』(1960年 / 95分)
監督：堀川弘通
出演：小林桂樹、原知佐子、平田昭彦 ほか

D『白い巨塔』(1966年 / 150分)
監督：山本薩夫
出演：田宮二郎、東野英治郎、藤村志保 ほか

2月12日(木)~15日(日)
会場：彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール

『グレート・ビューティー 追憶のローマ』

12日(木) 10:30 / 14:30 / 18:30
13日(金) 10:30 / 14:30 / 18:30
14日(土) 10:30 / 14:30 / 18:30
15日(日) 10:30 / 14:30

©2013 INDIGO FILM, BABE FILMS, PATHE PRODUCTION, FRANCE 2 CINEMA ©Gianni Fiorito
監督・脚本：パオロ・ソレンティーノ
出演：トニ・セルヴィッロ、カルロ・ヴェルドーネ、サブリーナ・フェリッリ、ファニー・アルダン ほか (2013年 / イタリア・フランス / 141分 / PG12)

3月13日(金)~15日(日)
会場：彩の国さいたま芸術劇場 映像ホール

『ウィークエンドはパリで』

13日(金) 10:30 / 14:00 / 17:00
14日(土) 10:30 / 14:00 / 17:00
15日(日) 10:30 / 14:00

監督：ロジャー・ミッシェル
出演：ジム・ブロードベント、リンゼイ・ダンカン ほか (2013年 / イギリス / 93分 / PG12)

PLAY

彩の国さいたま寄席 四季彩亭
～柳家花緑 新春落語競演会

日時：1月16日(金) 開演19:00
 会場：彩の国さいたま芸術劇場 小ホール
 出演：柳家花緑、三遊亭鬼丸、嵐気楼龍玉、
 古今亭文菊、柳家わさび
 チケット(税込)
 一般：3,000円 ゆうゆう割引(65歳以上・障がい者)：
 2,000円 メンバース：2,700円

蜷川幸雄80周年記念作品
ニナガワ×シェイクスピア レジェンド第2弾
『ハムレット』

日時：1月22日(木)～2月15日(日)
 ※開演時間はP.20のカレンダーにてご確認ください。
 会場：彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
 演出：蜷川幸雄
 作：W.シェイクスピア
 翻訳：河合祥一郎
 出演：藤原竜也、満島ひかり、鳳 蘭、平幹二朗
 ほか
 チケット(税込)
 一般・メンバース：S席 10,800円/A席 8,700円
 ※当日券は毎公演発売予定です。詳細は決定次ホーム
 ページ等でお知らせいたします。
 ※本公演はメンバース料金の設定はございません。

新春狂言 万作・萬斎の世界

日時：1月24日(土) 開演15:00
 会場：埼玉会館 大ホール
 出演：野村万作、野村萬斎、石田幸雄、深田博治、
 高野和憲、月崎晴夫、内藤 連、飯田 豪
 演目：『咲嘩』、『悪太郎』
 チケット(税込)
 一般：S席 5,000円/A席 4,000円/B席 3,000円
 U-25* (B席対象)：2,000円
 メンバース：S席 4,500円/A席 3,600円/B席
 2,700円
 ※当日券は当日12時よりS席のみ若干枚発売予定
 ■開演前に狂言講座を開催！
 日時：1月24日(土) 開演13:00(12:30開場)
 ※約1時間予定
 出演：深田博治、月崎晴夫、内藤 連
 ※1月24日公演のチケットをお持ちの方はどなたで
 もご参加いただけます。
 ※狂言講座終了後、公演準備が整うまで一旦客席より
 ご退場いただけます。

DANCE

日本昔ばなしのダンス
近藤良平『ねずみのすもう』
下司尚実『いっすんぼうし』

日時：1月31日(土) 開演13:00 / 16:00
 2月 1日(日) 開演13:00 / 16:00
 会場：彩の国さいたま芸術劇場 大練習室
 演目：『ねずみのすもう』
 振付：近藤良平
 出演：鎌倉道彦、藤田善宏、山本光二郎
 『いっすんぼうし』
 振付：下司尚実
 出演：佐々木富貴子、鈴木美奈子、下司尚実
 チケット(税込) 全席自由
 一般：大人(高校生以上) 2,000円/子ども(3歳以上
 中学生以下) 1,000円
 ※本公演は大練習室での公演のため、座席の様子が通
 常と異なるほか、座席数に限りがございます。(各回
 150席)
 ※3歳未満のお子様の入場はご遠慮ください。

MUSIC

彩の国さいたま芸術劇場開館20周年記念
ピアノ・エトワール・シリーズVol.26
アレクサンダー・ロマノフスキー

日時：1月17日(土) 開演15:00
 会場：彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール
 曲目：ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ第14番
 嬰ハ短調「月光」
 ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ第30番
 ホ長調
 ショパン/バラード第2番 へ長調
 ショパン/バラード第4番 へ短調
 ショパン/ピアノ・ソナタ第2番 変ロ短調
 チケット(税込)
 一般：正面席3,500円
 メンバース：正面席3,200円
 ※バルコニー席、学生席は予定枚数終了しました。

佐藤俊介の現在 Vol.1
ヴァイオリン×ダンス 一奏でる身体

詳細は
⇒P.14
～15

埼玉会館ランチタイム・コンサート第28回
東京吹奏楽団メンバーによる
金管五重奏+打楽器

日時：3月5日(木) 開演12:10(終演予定13:00)
 会場：埼玉会館 大ホール
 出演：松居洋輔・佐藤秀徳(トランペット)、
 渡辺善行(トロンボーン)、比嘉康志(ホルン)、
 野本和也(チューバ)、
 橋本淳平(パーカッション)
 曲目：プラスで紡ぐ日本の唄、
 カルメン・ファンタジー、
 マイケル・ジャクソン・メドレー ほか
 チケット(税込)
 全席指定 1,000円

庄司紗矢香&
ジャンルカ・カシオーリ
デュオ・リサイタル

詳細は
⇒P.16
～17

3歳以上のお子様から楽しんでいただける公演です。

*U-25チケットの詳細はP.23をご覧ください。

THEATER BRIDGE

Information

さいたまゴールド・シアター
「彩の国学術文化功労賞」受賞

蜷川幸雄率いる平均年齢75歳の演劇集団「さいたまゴールド・シアター」がこのたび「彩の国学術文化功労賞」を受賞いたしました。劇団は、平成25年のパリに引き続き、昨年11月、12月に香港、パリを含む「鴉よ、おれたちは弾丸をこめる」ツアー公演を行っており、国内外での活躍が県民に夢と希望を与えた功績をたたえられての表彰となりました。パリ公演から帰国後、埼玉県庁で開かれた贈呈式では4名のゴールド・シアターメンバーが出席し、上田清司県知事から賞状を贈呈されたほか、大盛況となった海外公演の報告をしました。彩の国さいたま芸術劇場を拠点に精力的に活動する「さいた



まゴールド・シアター」。今後の活動にも是非ご期待ください。

上田知事を囲んで、笑顔のさいたまゴールド・シアターメンバー(前列)
[平成26年12月17日/知事室にて]

Information

熊谷会館閉館に伴うお知らせ

日頃より当財団で管理している熊谷会館につきましてご愛顧いただき、厚く御礼申し上げます。
 このたび平成27年3月31日をもって、熊谷会館が閉館することとなりました。
 このため、熊谷会館の施設利用を終了しますとともに、窓口チケット販売、及びチケット引き換えについても同日をもって終了させていただきます。
 何卒ご了承くださいますようお願い申し上げます。

長い間のご利用ありがとうございました。



3月31日をもって閉館する熊谷会館

Information 「U-25」チケット、はじめました!

多くの若い方に、舞台芸術を愉しんでいただきたく25歳以下を対象に「U-25」チケットをはじめました。この機会にぜひ、親子で、学校のお友だち同士で劇場に足を運んでみませんか?

■販売場所

- ・SAFチケットセンター (10:00～19:00) 0570-064-939
- ・SAFオンラインチケット www.ticket.ne.jp/saf/
- ・窓口(彩の国さいたま芸術劇場、埼玉会館、熊谷会館[3月末まで])

■注意事項

- ・公演時、25歳以下の方が対象です。
- ・「U-25」チケットは対象の公演、日程、席種がございます。ご確認の上、お買い求めください。
- ・「U-25」チケットは公演当日、会場・入場口(もぎり)で身分証明書(学生証・保険証・免許証など公式に年齢を確認できるもの)と一緒に係員にお見せください。
- ・「U-25」チケットは枚数制限がございます。上限に達し次第、販売を終了いたします。

[チケットの購入方法について]

インターネット



埼玉県芸術文化振興財団
オンラインチケット

「SAF オンラインチケット」で、
発売初日 10:00 から公演前日
23:59 まで受付いたします。

[PC・携帯共通] <http://www.ticket.ne.jp/saf/>



メンバース 登録のご住所へ無料配送

一般 【クレジットカード決済】 ⇨ 【コンビニ発券】
または【コンビニ支払い】

※チケット代他に、店頭発券手数料(チケット1枚につき120円)が必要です。

電話予約



●チケットセンター

0570-064-939

10:00～19:00(彩の国さいたま芸術劇場休館日を除く)
※一部の携帯電話、PHS、IP 電話からは受付できません。

メンバース 登録のご住所へ無料配送

一般 【クレジットカード決済】 ⇨ 【コンビニ発券】
または【コンビニ支払い】

※チケット代他に、店頭発券手数料(チケット1枚につき120円)が必要です。
※コンビニ支払い後に宅配便での配送も承りますが、チケット代のほかに配送料(配送1件につき400円)が必要です。

窓口販売



下記窓口で直接購入いただけます。
電話予約したチケットの引取もできます。

- 彩の国さいたま芸術劇場 (10:00～19:00)
- 埼玉会館 (10:00～19:00)
- 熊谷会館 (10:00～17:00) [3月末まで]

※休館日をお確かめの上、ご来場ください。

メンバース 【口座引落】 ⇨ その場でチケットをお渡します。

一般 【現金】または【クレジットカード決済】 ⇨ ※手数料はかかりません。

ACCESSMAP アクセスマップ

[彩の国さいたま芸術劇場]



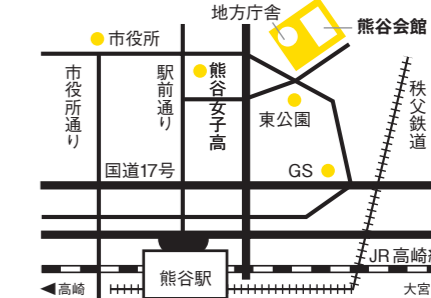
〒338-8506 埼玉県さいたま市中央区上峰 3-15-1
 電話：048-858-5500(代) ファックス：048-858-5515
 ●電車でのアクセス
 → JR 埼京線と野本町駅(西口)下車 徒歩7分
 ●バスでのアクセス
 → JR 京浜東北線北浦和駅から西武バス大久保行き
 「彩の国さいたま芸術劇場入口」下車 徒歩2分

[埼玉会館]



〒330-8518 埼玉県さいたま市浦和区高砂 3-1-4
 電話：048-829-2471(代) ファックス：048-829-2477
 ●電車でのアクセス
 → JR 宇都宮線・高崎線・京浜東北線浦和駅(西口)下車
 徒歩6分

[熊谷会館]



〒360-0031 埼玉県熊谷市末広 3-9-2
 電話：048-523-2535(代) ファックス：048-523-2536
 ●電車でのアクセス
 → JR 高崎線熊谷駅(北口)下車 徒歩15分

※駐車台数に限りがありますので、ご来場の際はなるべく公共交通機関をご利用ください。

(株) 与野フードセンター / (株) 亀屋 / (株) 松本商会 / (有) 香山壽夫建築研究所 / 埼玉新聞社 / テレビ埼玉ミュージック / 埼玉りそな銀行 / (株) バシフィックアートセンター / (株) アサヒコミュニケーションズ / FM NACK5 / 東京ガス(株) / カヤバ システム マシナリー(株) / (株) タムロン / (株) 十万石ふくさや / 森平舞台機構(株) / 東芝エルティエエンジニアリング(株) / 埼玉トヨタ自動車(株) / (有) 齋賀設計工務 / 武蔵野銀行 / 浦和ロイヤルパインズホテル / アルビーノ村 / 国際照明(株) / 埼玉スバル桶本興業(株) / (株) 佐伯紙工所 / (株) 太陽商工 / (株) しまむら / (有) 六辻ゴルフセンター / 不動産(株) / ビストロ やま / 埼玉縣信用金庫 / (株) 栗原運輸彩の国SPグループ / (有) プラネッツ / 関東自動車(株) / (株) デサン / セントラル自動車技研(株) / 丸美屋食品工業(株) / ボラスグループ / ひがし歯科 / 埼玉トヨペット(株) / 公認会計士 宮原敏夫事務所 / (株) 価値総合研究所 / (株) 埼玉交通 / 医療法人 顕正会 蓮田病院 / (株) ウイズネット / サイデン化学(株) / アイル・コーポレーション(株) / 五光印刷(株) / 旭ビル管理(株) / ヤマハサウンドシステム(株) / (株) エヌテックサービス / (株) クリーン工房 / (株) つばめタクシー / (株) サンワックス / (株) 総合舞台(株) / タクトコーポレーション / 広総業(株) / (財) さいたま住宅検査センター / (株) 国大セミナー / (株) NEWSエンターテインメント / (株) オーガス / イープラス / 六三四堂印刷(株) / 医療法人 榎会 林整形外科 / 埼玉県整形外科医会 / 医療法人社団 山粋会 山崎整形外科 / サンケイリビング新聞社 / (株) 三和広告社 / (株) セノン / 東京新聞ショッパー / (株) 松尾楽器商会 / (有) 中央舞台サービス / JA埼玉県中央会 / 日本大学芸術学部 / (株) 川口自動車交通 / (株) ホンダカーズ埼玉ファミリーマートあすまや / (有) 杉田電機 / 丸茂電機(株) / 太平ビルサービス(株) / さいたま支店 / (株) 片岡食品 / (株) 協栄 / (株) ヨコハマタイヤジャパン / NTT東日本 埼玉支店 / チャコット(株) / (株) 平和自動車 / 光陽オリエントジャパン(株) / 埼玉建設(株) / さくらMusic Office / 神田大塚法律事務所 / クワバラ・パンフキン / 駒橋内科医院 / 東和産業(株) / テレビ埼玉 / 日本ビストロリング(株) / 金井大道具(株) / 国立大学法人 埼玉大学

【お問い合わせ先】(公財) 埼玉県芸術文化振興財団 営業宣伝課 サポーター会員担当 TEL 048-858-5507

H26.12.25 現在 / 一部未掲載

彩の国 LOUNGE vol.15

ハムレットの言葉遊び、 クロードディアスのオクシモロン

文◎河合祥一郎 (東京大学大学院教授)



カーテンに隠れるポローニアス (ヴィベール画 / 1868年)

ハムレットの武器は、言葉、言葉、言葉だ。それも、駄洒落 (pun) を駆使した言葉遊びが多い。

たとえば、ポローニアスがかつて『ジュリアス・シーザー』に出演し、神殿でブルータスに殺されるシーザーを演じたと聞くと、ハムレットは言う——「神殿で死んでんのか」——原文を直訳すると「議事堂 (Capitol) でそんな大きな (capital) 馬鹿を殺すなんて、ブルータス (Brutus) も野蛮 (brute) だな」と実は二重の言葉遊びになっている。

この劇におけるハムレットの第一声も「おせじにも、叔父は親父と同じとは言えない」という凝った表現になっている (kin と kind の言葉遊び)。

一つの音が二重の意味を持つこの表現法は、やがてハムレットの佯狂の効果を倍増していく。

こうしたハムレットの素直でない物言いに対して、クロードディアスはオクシモロン (撞着語法) で対応する。先代王の死を嘆くべきときにガートルードを自分の妃としたことを、「^{うれ}愁いに沈んだ喜びをもって……葬儀には陽気な調べを、婚礼には挽歌を奏で……妻に迎えた」と言うのがそれだ。

オクシモロンは、『マクベス』の魔女の「きれいは汚い、汚いはきれい」に代表されるように、あえて矛盾したことを言う表現法だが、ハムレットの目から見れば、獣のように下劣な男が神聖な王冠を戴いているというクロードディアスの存在自体がオクシモロンなのだ。

言葉遊びとオクシモロン、そんな対立に注目すると、『ハムレット』もさらに深く楽しめる。

祈るクロードディアスに近づくハムレット (ドラクロワ画 / 1843年)

